

# 彰義隊と袂を分かった龍虎隊、頭取間中龍吉

加藤良一

令和3年（2021）10月20日

今夏、埼玉県幸手市郷土資料館で開催された企画展〈**渋沢栄一と幸手**〉で、明治維新に関係した**龍虎隊**の存在を知った。

この企画展では、青年時代の**渋沢栄一**が従兄の**渋沢喜作**とともに元治元年（1864）2月、一橋家に仕出したのち、**慶喜公**警護のための人選御用（人集め）として同年5月、京都を出て全国の一橋家領知（土地を領有して支配すること）を巡回し、8月に武州葛飾郡**高須賀村**一帯を廻村したときの関連資料を展示していた。高須賀村は現在の埼玉県幸手市の桜の名所として有名な権現堂のあたりであろうか。

当時、一橋家仕出に合せて、渋沢栄一は**篤太夫**へ、同じく渋沢喜作は**成一郎**へとそれぞれ改名していた。

栄一が初めて一橋家で与えられた役目は、最も身分の低い奥口番という御用談所の番人であった。俸給は「四石二人扶持」で、京都滞在中は月々、四両一分の手当がついた。

栄一が初出勤したときの様子がNHK大河ドラマ『青天を衝け』で流されたが、奥口番には同役の者が二人いると教えられて詰所へ挨拶にゆくと、そのきれいとは言いがたい部屋に老人二名が詰めていた。座って挨拶しようとするといつが栄一を咎め、そこは置の目が上席の者より上座になるから座ってはならぬ、と言いつ放つた。栄一は馬鹿馬鹿しさに戸惑いながらも、とりあえず失礼を詫び入れた。そこで上役から「御用談所下役」への出役を命じられ脇の一室で喜作とともに寝泊りすることになった。この一件からも、栄一らは硬直した幕藩体制の悪しき風習を感じたのであった。

## ◇ つまづいた人選御用 ◇

そもそも一橋家が何故人集めをしなければならなかったかといえば、慶喜が朝廷から**禁裏御守衛総督**※を命ぜられたものの、当時の一橋家の兵力は慶喜警護で手一杯であり戦力らしきものは持っていなかったからである。そこで、栄一と喜作は一橋家領内の村々を巡って農兵を募

集して回る役を申し出て拝命されたというわけである。

※ **禁裏御守衛総督**は、幕末に幕府の了解のもと、朝廷が禁裏（京都御所）警護のために設置した役職。任命された慶喜は、大坂湾周辺から侵攻してくる外国勢力に備えるため、**摂海防禦指揮**という役職にも同時に任命された。

栄一の目論見は、自身が農民から出仕した経験を元にして説得すれば容易に人が集められると踏んでいたが、ことはそう容易くはなかった。事前に京都勘定奉行所から領知の各代官所へ、歩兵取立御用掛の渋沢篤太夫を差し向けるから、指示に従って兵を集めよとの連絡があらかじめ行っていた。ところが、備中（現岡山県西部）では、代官に邪魔されなかなか応募してくるものがなかった。

そこで、腰を据えて取り組むことにした。あれこれ情報収集するなかで、村民の尊敬を得ている儒学者**阪谷希八郎**を知り、早速出向いて塾生たちと議論し宴席を設けるなど交流を深めた。また、剣術指南と手合わせしやすやすと打ち負かしてしまった。すると、一人二人と志願してくるものが現れてきた。

代官は、一橋家にも山師のような輩が増えてきた、面倒なことを言い募るから志願する必要はないと、無視するよう仕組んでいたのである。それを知った栄一は、代官に対して、重大な御用で来ているのに無視するようなことがあってはただでは済まない、栄一自身が辞職するに留まらず代官にも迷惑が掛かると問い詰めると、代官は平謝りで協力を約束した。すると、ほどなく応募してくるものが300人も集まってきた。他地域も含めて456人が翌年春までに京都へ集合し歩兵部隊を形成した。

### ◇ 剣術を買われた間中龍吉 ◇

高須賀村で白羽の矢が立った人物が当時23歳の<sup>まなかりゅうきち</sup>間中龍吉であった。龍吉は、天保13年（1842）9月、高須賀村にほど近い惣新田村に生まれた。11歳より武芸に励み、長じて直心影流の免許皆伝を受ける。一橋家へ抱え入れられた龍吉は「<sup>こころがけよろしき</sup>剣術心掛宜敷」として、四石<sup>いちにんはんぶじ</sup>一人半扶持\*が与えられた。

※ 江戸時代の俸祿の一基準。幕府の場合は、一人一日の食糧は玄米約五合、一か月一斗五升を標準とし、これの一年分の米またはそれに相当する金銭。米一石は150kg（米一合の千倍）に当たる。

龍吉は、慶応元年（1865）11月には「奥口番並過人・床机廻大砲隊剣術世話心得助」、

翌2年1月「奥口番過人・床机廻銃隊指揮役並勤方」となり、第二次長州戦争では「行軍嚮導」を命じられている。

## ◇ 彰義隊の設立 ◇

文久2年（1862）、御三卿<sup>ごさんきやう</sup>※の一橋家当主慶喜<sup>よしのぶ</sup>は、江戸幕府14代将軍徳川家茂<sup>いえもち</sup>の将軍後見職となった。渋沢栄一<sup>いずさ 栄一</sup>は、元治元年（1864）2月、一橋家用人、平岡円四郎<sup>ひらおか 円四郎</sup>の推挙で従兄の渋沢喜作<sup>いずさ 喜作</sup>とともに同家の家臣となった。

※ 御三卿は、江戸時代中期に徳川一族から分立した大名家で、田安德川家（田安家）、一橋徳川家（一橋家）、清水徳川家（清水家）がある。三家の当主は、公卿の位である従三位に昇り、省の長官（卿）に任ぜられたから御三卿といった。

慶応2年（1866）慶喜が徳川将軍家を継いだことで、栄一と喜作は囚らざるも幕臣となった。続く慶応4年（1868）正月、鳥羽・伏見の戦いが勃発し、慶喜は大坂城を脱出し水路江戸城へ戻った。しかし、新政府は、慶喜追討令を発令したため、追い詰められた慶喜は江戸城を退出、上野寛永寺にて新政府への恭順の意を表した。慶喜に従ってきた幕臣たちは、主君の無念を晴らさんと俄かに動き出した。

慶応4年（1868）2月12日、幕臣17名が雑司ヶ谷（現東京都豊島区）の茶屋茗荷屋において密会を開いた。ここに間中龍吉<sup>まなか 龍吉</sup>も参加していた。続く2月23日浅草本願寺での会合で彰義隊結成が決まり、頭取に渋沢成一郎<sup>いずさ 成一郎</sup>、副頭取天野八郎<sup>あまの 八郎</sup>、幹事に本多敏三郎<sup>ほんた 敏三郎</sup>、伴門五郎<sup>ばんもんごろう</sup>、須永於兔之輔<sup>すながおとのすけ</sup>が就任した。

## ◇ 龍虎隊の頭末 ◇

明治43年（1910）に書かれた山崎有信<sup>やまざき 有信</sup>著『彰義隊戦史』（隆文館）の第三編〈彰義隊戦闘資料〉に「龍虎隊の頭末」という項目がある。

著者の山崎有信氏は、その冒頭で「龍虎隊に就ては世評紛々反対の輩種々の悪評を下せしものあり、（三文隊、日和見隊、又は両股隊と云ひしと聞く）依て著者は其の真相を確めん為め当時龍虎隊の伍長たりし最上良平氏を浅草区猿若町に訪ふ」と、真実はどうであったか実態調査を遂行した主旨を述べている。なぜ最上良平氏かというに、最上氏が当時の状況をもっとも詳しく知る一人であり、且つ龍虎隊隊長岡野誠一郎<sup>おかの 誠一郎</sup>氏の所有していた関係書類をことごとく保存しており、それに基づく説明は信憑性が高いと知ったからであった。

この『彰義隊戦史』では、龍虎隊はなぜ彰義隊とは別の道を選んだのか、志を同じくする者同士がなぜ心をひとつにできなかったのか、などを明らかにしている。

龍虎隊は官軍と幕府の中間に位置し、彰義隊とは深遠の関係を持っていた。従って、橋府随従※のものたち17名がのちに彰義隊となる組織の結成を目指す会合を雑司ヶ谷の茗荷屋で開いた折には、岡野誠一郎等も参加していた。そこで、同盟に加わるよう強く勧められたものの、このとき既にその主義において異なることを感じとり、加わることはなかった。

※ 橋府随従とは、一橋家を慕って家臣となること。

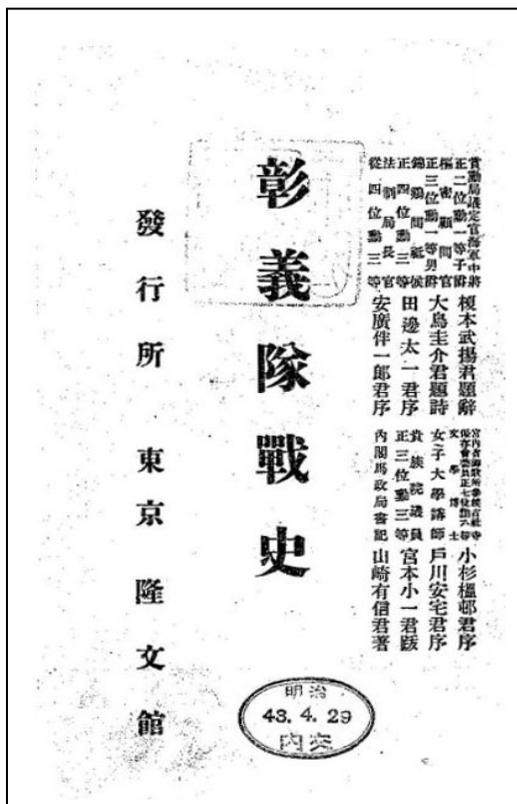
慶喜公が京都在住の際、床机廻役として一橋家に仕えていた岡野誠一郎、大川平三、間中龍吉、佐竹勇雄の四人は、慶喜公が江戸へ戻るに際し同じく江戸へ帰り、撤

兵隊に加わった。かたや歩兵隊という組織もあったが、これは従来の武士ではなく新たに作られたもので、中には博徒やその他の破落戸ごろつき（ならずもの）の如きものが紛れ込んでおり、市中を荒し回っては無銭飲食を働くなどその粗暴さは目に余る状況だった。

また歩兵隊の仮面を被った輩が吉原において遊興に耽った拳句、問題を起こして殺されるものが現れるなど到底武士とは思えぬ乱暴狼藉を極めていた。岡野誠一郎等はこのような江戸市中の無政府状態を憂い、前記四名並びに大森良平、海野謙一郎、大師堂常五郎庵、大川亘にゅうこの八名で団結し、乳虎隊と称して浅草を中心に市中を取り締まった。乳虎隊発足当時、世の中ではこれを「龍虎隊」と聞き間違えられたが、紆余曲折を経て最終的に龍虎隊と改められた。

乳虎とは、出産後の乳飲み子をもつ雌虎のこと、性質が最も狂暴だという。しかし、乳虎隊においては、穏和を専らとし、一朝事あるときは生命を賭して戦うということを主旨としていた。

しかし、龍吉は彰義隊に加わることはなく、岡野誠一郎、大川平三らとともに別個に乳虎隊を



結成した。隊長には岡野、龍吉は副隊長に就任した。本営を浅草厩橋の榎寺うまやばし かやでらに置き、彰義隊と同じく市中の治安維持に努めるという名目で活動を始めた。

ところが、龍吉は馬で江戸市中見廻りをしていたところ、蔵前で反対派に遭遇し、右足に槍傷を負ってしまった。傷の程度についての詳細はわからないが、明治維新後に、群馬、福島、埼玉で剣道教授を行っていることや、明治21年（1888）には埼玉県巡査になっていること、明治38年（1905）川越明信館の第三代館長に就任したことをみても、さほどの重症ではなかった様子がうかがえる。大正13年（1924）永眠、享年82歳だった。

**龍虎隊**は、**彰義隊**の掲げる「忠義奮発・意気激烈」に基づく過激なやり方に賛同することができずに袂を分かち、別行動をとり浅草を中心にその治安維持に務め、穏健な恭順派として新政府軍に加担したため、両股隊とか日和見隊と揶揄された。

そのようなことから『**彰義隊戦史**』で、著者**山崎有信**氏が「龍虎隊に就ては世評紛々反対の輩種々の悪評を下せしものあり」との評判に疑義を感じ、元龍虎隊伍長**最上良平**氏から事情を聴取し、かつ残された文書をつづさに調べた結果、以下のように汚名を晴らすことを著わした。

戊辰十二月二十七日御仕方替に付き、軍務官より解隊仰せ付けられたるを以て吉田藩邸に於ける本隊は凡て之を解散したり、嗚呼龍虎隊の如き、世評紛々の中に立ち毅然として終始志を変せず、百難を排し、一面勤王を旨とし、一面市中を取鎮め以て、慶喜公恭順の意思に反せざりしが如きは実に隊長岡野誠一郎の温厚篤実にして能く部下を御するの道を失はざりしものにして百世の後否三十余年の今日に至て議論初めて定まりたるものなり。殊に浅草区民の如き龍虎隊の庇護を受くる尤も大なりとす。然るに今日に至り尚之を口にすもの少し、然れども天は昭々として之を知る著者は龍虎隊の如き勤王の功績は永く之を史に載せ以て不朽に伝えんとす。今や隊長岡野誠一郎を始め鬼籍に入るもの少からず、況や当時斬殺せられたるものも亦少からず。世の有志家進んで之が為め一大供養を為さんことを深く望むものなり。

Back

「なんやか」TOPへ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る